自隱禪師假名法語

寶鏡窟之記 全

發行書肆

三倉文林堂

寶鏡窟之記

寶鏡窟は今現に伊豆國賀茂郡手石村にあり

經に曰く佛身法界に充滿してつねに一切群生の前に示現す即ち目の見る處總に是れ如來の清淨法身にあらずして何ぞ然らしかるを都て見奉る事能わず惠眼既に盲たる故なるべし又曰く我常にこゝに住してらぬに說法して無數億の衆生を敎化すとしからは即ち耳の聞く處諸佛微妙の聲聞にしてずして何ぞや然るを都て聞奉る事能はず天耳既に塞がるが故ならずや寛永の初め豆州賀茂郡手石村の漁翁つねに產業の卑賤を恨み深く來生の苦輪を恐れ晝夜に念佛して怠る事なし自ら云く漁獵は我が家業なり念佛は我が私業なりと常に船上にありても終夜念佛して動もすれば網する事もまた忘るゝ事なりけり伊つの頃よりか貴き光の時々に海面に浮ぶを見る漁翁是を怪みて船をして彼の光の處に到れば岩窟あり廣さ二丈ばかり成るべし遙に窟中

を窺ひ望むに昏々として淺深を計る事能わず潮に隨て開閉す滿る時は一片の水波窟中に充つ一日漁翁その潮勢のおつるを待て畏づ〳〵彼の窟中に棹もて兩岩をさゝへて進む事數十笏轉々進めば轉くらし忽然として股戰き膽震へ心身驚き恐れて正に正氣を失せんとす起おひて合掌跪坐して念佛する事數十聲身心次第に平穩なる事を覺ふ少焉あつて徐々として眼をひらけは一遍の金光窟中に煥發して瑞耀膽を照らし異香掬しそべし熟〳〵見れは無量壽尊及ひ二大士をさへに端嚴珠特の妙相有て紫磨金の聖容嚴然たり窟中廣博なる事大虛の疊廓たるが如し如來の身量何千尺と云ふ事を知らす漁翁即ち悲泣念佛して身心ともに消へ失せたるが如し覺へず時を移す事數刻乍ち怒濤の岸を打つ聲を聞く既にして潮の洞口を塞がん事を恐れて泣〳〵尊容に別れ奉て念佛しながら漕かへりぬ扨て里人斯なん告たりける

程に遠近驚き起ちて潮の落ち洞口のひらくを待ちて行ひて膽禮する者ひきもきらず正に窟中に入るに當て涕淚悲泣感汗肌をひたし佛念して伏しまろぶ者あり打見て興さめたる貌して守り居るもあり怪しげ成る貌して彼方此方見まわし冷笑もあり是皆信心の淺深罪業の輕重に隨て所見まち〳〵なる故なり彼の涕淚悲泣する底は如來の身量或ひは三尺或ひは五尺乃至一丈乃至二丈紫金光聚の中に嚴然として立せ玉ふを拜し奉りたる者なり是上品の行者なりと知るべし又彼の打仰ぎて混らに念佛する底は金色の聖容或ひは五寸或ひは七寸きら〳〵と照輝て窟中に立せ玉ふを拜し奉る者なり是中品の行者なりと知るべし興さめたる貌して守り居けるは金光をも拜せず寶薰をもきかず混黑にくろく只爛木などのかくなる者或ひは三寸或ひは五寸目鼻の分ちもなくて三つ並たち玉ふを見おりてさしてもなき事をぎや

う聲らしく云ひ觸して多の人々を欺き貶して騷しめける事よ憎き漁人めが仕業なるぞかしなど興さましたる者なり是は下品の行者なりと知るべし又彼のうろ〳〵として彼方此方見廻し冷笑けるは無智昏愚の下郎尋常に世を信せず因果を知らず少しばかり假名雙紙など讀覺へて荒唐のみ利て物知りたてする斷見外道の部類なりと知るべし神明にも尊ばれ佛陀にも憐まれ玉ひにだりける惠心院の僧都の大信は大佛を見小信は小佛を見ると云ひおかれけるは止事なく貴も覺へらるれ彼の人々の信根の淺深罪業の輕重に隨て所見まち〳〵成ると思ふに毫釐も差ふ事なし譬へは明鏡の臺に當て娟醜少しも遁ざるが如し是故に寶鏡窟と稱し鏡岩と名つく俗には近頃ろ彌陀窟と云ふ或人の云く我聞く如來は三身を具足し玉ふと且つ夫れ寶鏡窟の如來の如きは法身と云んか報身とせんか將又稱して化身と云んか如來既に

群生を利濟せんが爲に世に出現し玉ふとならは城邑聚落いかにも人たち多かる處に現し玉ひて多くの人を利益し玉ふへきに何ぞや遠境邊土人里もつゝかぬ處に雨をさけ風を恐れしばらく潮の落るを待なる危き岩穴の中に應現し玉ふ事は何ぞや又聞く番々出世の如來何れも開佛智見道の一事を以て本懷とし玉ふとしかるを獨り無量壽尊のみ往生淨土の事を以て我等を引導し玉ふ事は何ぞや予曰く佛に三身あり法身を以つて體とす報化の二身は用なり今寶鏡窟の如來の如きは法身と云んも亦得たり報化の二身と稱せんもまた得たり天堂地獄淨邦穢土山河大地佛界魔宮草木叢林有情非情盡く是如來の眞法身當所をはなれず常に堪然たりといへども見性の上士に非ざるよりんば輙く見る事能わず是故に請佛報化の二身を現じて衆生を引導す禪定誦經念佛持戒分に隨て進修して怠らざる時は情念止み思想盡き一心

蛤蜊瓢瓠小婦念佛

不亂の田地に到て三昧發得し圓解煥發し乍ら如來の眞法身に契當す此時に當て五眼俄に開明し四智立處に成就す是卽ち開佛智見道の當體にして見性入理の一刹那なり思想盡き情念休する時節を往と云ひ一心不亂の田地に到るを生と云ふ如上の眞理現前して唯有一乘の大事目前に分明なるを來と云ふ此時に當て行者心境不二理智冥合するを迎と云ふ然らば卽ち來迎往生開佛智見畢竟同一模範なる者にあらずや須く知るべし三身不二不二三身三世古今の間に見性せざるの佛祖なく見性せざるの賢聖なき事を禪定誦經念佛持戒皆是見性の助因なるべし彼の黃卷赤軸を執らへて佛經なりと偏執し泥丸塑像を執らへて佛像なりと心得む人々は夢にも曾て見る事能はじ是佛身の應現豈又城邑聚落をしも云んや彼の觀世大士の如きは蛤蜊の胎中に身を現し瓢瓠の肚裏に跡を垂れ遠境邊土金砂灘と云へる處の馬郎が小婦

魚の因緣卷末に群記す

と身を現し玉ひ又海嶋邊鄙人多く住みける所に念佛の魚といへるありき漁者共多く濱邊に打ち寄り高聲念佛時を移し皆々一心不亂に到りける時魚ども多く海面に浮ぶ此時網を下ろせば夥しく魚を得念佛の多少聲の高下に隨て魚を得る事もまた多少あり是故に此處の民念佛を以て家業の如くす傳へて云此魚彌陀の化現にして無佛世界の衆生を濟度し玉はん爲に斯の如きの善巧ありと嗚呼佛菩薩の大悲善巧は凡愚の計り知るべき事にしあらず今此寶鏡窟の如來も行者罪障の輕重信心の精麁に隨て品々に拜まれさせ玉ふを思へば彼の嶋の念佛の魚に少しも違わせ玉ふ事かは熟と思ひまはせば身の毛起ちて恐ろしく尊くて頻に悲嘆の涙こそこぼるれ愚老抔も是よりは遙か遠國の者に侍り此御佛の尊き御有樣を風かに傳へ聞き奉りてあわれ佛神の冥助もおはせよがし足を限りに彼の伊豆の國なる賀茂郡とかや云ふ

なる處までたどり行きて彼の御佛の貴き御影成りとも伏しおがみ奉りて後の世の事をも歎き申度き事よと思ひつゝけていつしか廻國の姿にやつし成して漕れ來りて同行三五輩海士の小船のあやしげ成るを請ひ借りて諸とともに窟中に入り念佛して伏し拜み奉りにけるに一目見奉て伏ししづみて念佛しながらぐし〳〵と泣出すもあり一目見奉りてより有難がりて感涙するも有り一人は興さめ貌して方〳〵は何を目あてに感涙してさは泣玉ふぞおのれは唯ほのくらき斗りにて物こそ見つけ侍らぬ如何にもしてかたしろ成りとも見屆け奉りて和殿原か如く有難かり度き事よとて目おし拭ひ首ひねりまはしてかなたこなた見回わし首べを搔もありけり愚老が其時拜し奉りにたるはほの暗き中に彼の光のちら〳〵とのみして滿月の御面も青蓮目の御眸も見へ分ち玉わで御佛の御影とおぼしきもの三たり立ち玉へるを

拜み奉りて少しは信心もさめ心地しけるが定て貴き事にやおわすらむと有難たげに伏し拜みて佛念し侍りにたりき飯り來りて熟〳〵と思ひかこちにけるは七旬に近き者の遙々の旅地を三途の罪障をも懺悔し六趣の苦患をも歎き申度くてさまよひ來りたる者を御影をたにもはか〳〵しく拜まれさせ玉わぬ事よと少しは恨み申す心地もさしおこりにたりしが返して思へば三界無比の大聖十力調御の如來にて渡らせ玉ふものを如何にや憎愛差別の御心のおはすへきぞ差別は邪て我か信心の淺深にこそ依るべき物を淺猿しくも恨み奉りし事よと思ひ定めて從前の罪障を懺悔し當來の苦因を恐れて至誠に專唱稱名する事半時再度び彼の巖窟に入り拜し申けるに光明も相好も以前には遙に違わせ玉ひて一際殊勝におがまれさせ玉ひける程に感涙肝に銘じ侍りき是より思ひ入りて洗季末代流轉常沒の我等が爲には上も

なき善知識にてわたらせ玉ふものを尊容に別れ奉りて頼みもなき露命に何地へかうかれ行くべき永く此處に有りて尊容につかへ奉りて兎にも角にも成りはてたらむにはまたなき勝縁なるべき物をと處々の靈場に詣ふで奉るべき望みも絶へはて専唱稱名の外他事無く打成り侍りぬ且又國々より御影拝み奉らむとて慕たひ來り玉へる人々の涙風打つゝきたる頃しも參りあい玉ひて風波の靜まるを待わび玉へる人々のいたわしさに打寄り念佛して涙の晴れ間を待ち玉へがしの心に處々勸進し申て一宇の草廬を營み形の如く尊容を寫し奉りて堂上に安置し奉りぬ願くは此勝縁に答へて我等も及び一切の人々も諸ともに生死の魔網を破り速かに一心不亂の田地に到りて唯心の淨土に生して己心の彌陀に値偶し奉らむ事

惟時

寛延第三庚午歳佛生日

沙羅樹下闡提老衲書

○蛤蜊の胎中に身を現し玉ひし事

觀音持驗紀に曰く。唐の。文宗。蛤蜊を嗜み。東南沿海頻年。貢に入る。民。苦に勝へず。一日。御庖に。一の巨蛤を獲。刀を以て劈に開かず之を扣けば。乃ち張る。中に觀音の梵相あり。帝。愕然として。命じて金を以て。檀香盒を飾りて。焉を貯ふ。後ち惟正禪師に問ふ。師の曰く物に虛應なし。乃ち陛下の信心を啓き。用を節して。人を愛するを以てするのみ。經に曰く。菩薩身を以て得度すべき者には。即ち菩薩の身を現じて。爲めに法を說くと。帝の曰く菩薩の身を見る。未だ說法を聞かずと。師の曰く陛下信ずるや否や。帝

の曰く。焉ぞ。敢て信せざらむや。師の曰く。此の如く。陛下其の說法を聞き玉ひ竟ぬと。帝大に悅ひ悟り。永く蛤を食するとを戒む。因て天下の寺院に。詔りして。各觀音の像を立つ。則ち落伽從て來る所なり

○鄂州の肚裏に跡を垂玉ひし事

觀音新驗錄に曰く。總州多劫の地に。僧伽藍あり。樹林と號す。觀世音の像を奉ず。俄に寺の災に値ふて。其の像悉く煨燼となる。何くとも無くして。煨燼の中に於て一の匏を生ず。民人剖つて之を視れば。內に大士の像あり。儼として寺に奉ずる所の者の如し。歡喜感嘆して。夕顏の觀音と曰ふ。此方匏の花を夕顏と名くるを以て故に云ふ。

○馬郎が小婦と身を現し玉ひし事

觀音持驗紀に曰く。唐の馬郎が婦者。陝右に出づ。是より先き。此地俗騎射を習て三寶の名あるとを知らず。元和十二年に忽ちに美女あり。籃を挈

世に魚籃觀音と云は是なり

げ魚を鬻く。人競ふて之を娶んと欲す。女の曰く。一夕に能く普門品を誦する者は。則ち吾れ之に歸がむと。黎明能く誦する者。二十四輩あり。復た授るに金剛般若を以するに。能く誦する者猶十人。乃ち更に法華の全經を授け。期するに三日に通徹するとを以てす。獨り馬氏が子。之れを能くす乃ち禮を具て歸を迎ふ。門に入れば女疾と稱し別房に止らんとを求め。須臾にして。便ち死し體即ち爛壞すれば。遂に焉を瘞む。數日にして紫衣の老僧あつて。葬所に至て命して啓き視れば。唯だ黃金鎖子骨のみ。衆に謂て曰く。此れは觀音大士汝が輩の障重を憫むが故に。方便を垂れて示現し以て汝を化するのみと。言ひ訖て空に飛んで去る。

○念佛魚の事

三國傳記に曰く。梵に曰く。執師子國の西南に當て。海の上へ幾千里と云ふ遠きとを知らざる所に。一の島あり東に望めば海漫々として水地軸

を浸し。西に顧りみれば雲滔々として濤天隅に連れり。星落ては金の影かと疑がひ。月沉ては珠の光りに似たり。人屋纔に五百餘家なり。是に栖む者ども皆魚を捕へて食と爲す。更に佛法の名字を聞かず只舟船を家として釣を垂れ。風波を里として網を下すを業とせり。或る時數千の大魚海の渚に寄り來り一一に人の物を云ふが如く。南無阿彌陀佛と唱ふ。海人等之を見て其の所由を知らざれども。唯だ彼の魚の唱へ言ふ故に阿彌陀魚と名けたり。人有りて南無阿彌陀佛と唱ふれば。魚漸く岸に近付く頻りに唱ふれば速に近付けるを。其の魚を取て食するに肉甚だ味ひ美なり。然るに若し諸人能く唱へて取る所の魚の味は最上なり。少し唱へて捕る魚の肉は少し辛く苦し。之に因て一渚の漁人魚肉の味に躭著して阿彌陀佛の名號を唱ふるとを業とす。然るに初め魚を捕て食せる者壽命終て三月の後ち紫雲に乘じ光明を放て。端嚴美麗の姿にて海

濱に至り諸人に告て云く。吾は是れ魚を捕し中の老首某なり。魚を捕んの爲めに南無阿彌陀佛と唱へし故に命終の後極樂世界に生じ。刹那恩愛の別をば返て永く法界の慈悲と成し。須臾に骨肉の契を改て廣く無緣の利生に替たり。其の大魚は阿彌陀如來の化作なり彼の佛の我等が愚癡を哀愍し玉ひて大魚身と作り念佛三昧を勸進し玉ふ。極樂世界と云は是從西方に十萬億國土を過て有なり。彼の國に生る者は皆快樂を受け自然の裁縫の妙服を衣と爲し。珠玉樓閣の床の座を居と爲し。百億瓔珞の鐶釧あり。七重寶網の宮殿あり。黃金の池の底には白銀の沙あり。水精の池の底には瑠璃の沙あり。若し食せんと欲する時は七寶の机現前し五調の味ひ鉢に滿ち香美比ひ無く甜酢意に隨ふ。食し已れば色力增長し。事已れば化して去り。時至りぬれば復た現ず。人人願生すべし。今云ふ所を。若し信せずんば。當に魚の骨を見るべし。皆是れ蓮花ならん。諸人

歡喜して捨る所の魚の骨を見るに皆是れ蓮花と成れり。見る者感悟して殺生を斷して。眞實に阿彌陀佛を念ぜしかば其の所の人皆淨土に生る。執師子國の賢大阿羅漢神通に乘じて彼の島に到る傳說する事斯の如し。

寶鏡窟之記畢

明治廿六年八月二十四日印刷
明治廿六年八月二十七日發行

正價金四錢

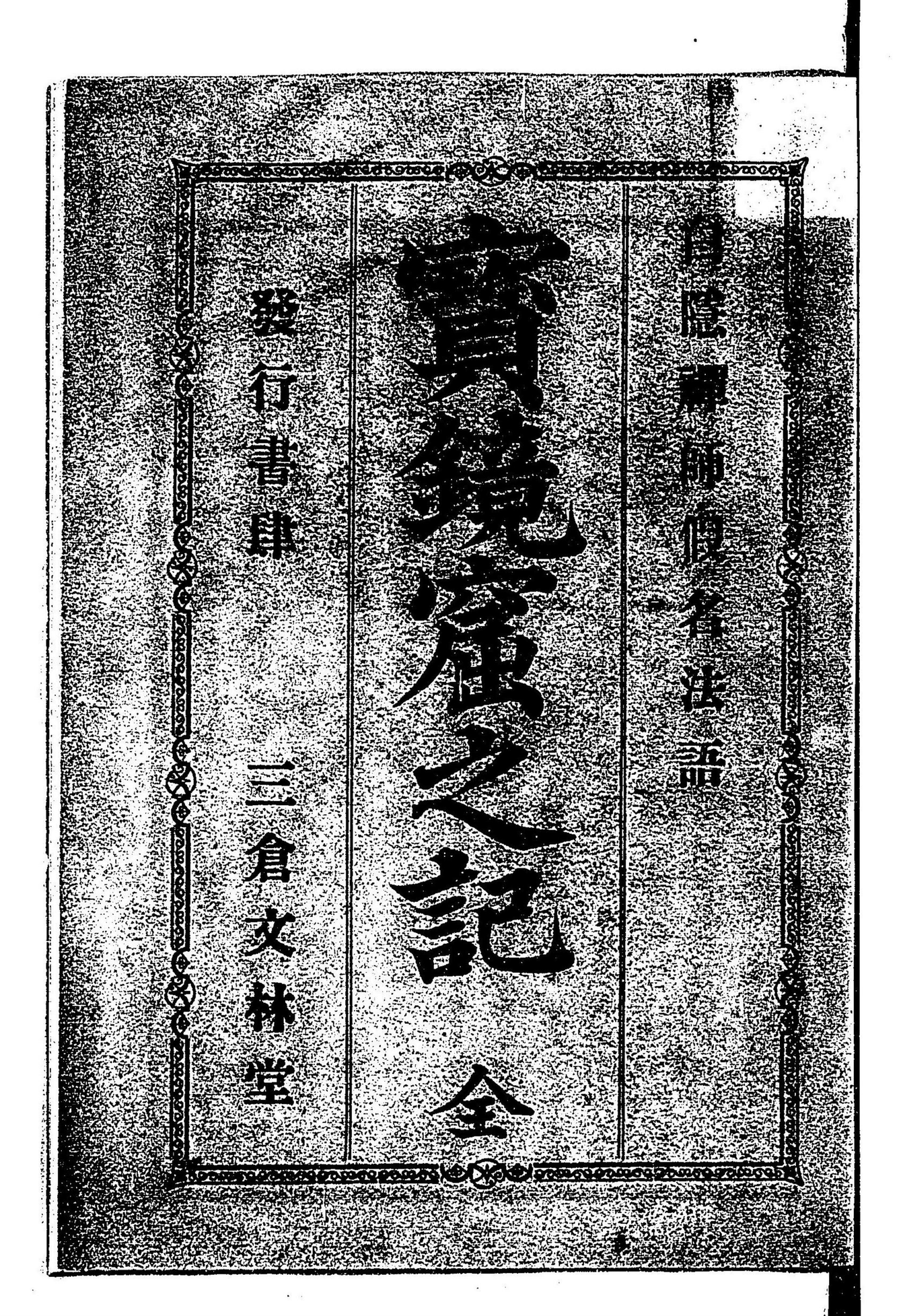
註解者　東京府士族　笹田桑太郎　東京市芝區濱松町一丁目十五番地

發行者　東京府士族　三倉鉦三郎　東京市淺草區北清島町八番地

印刷者　根岸高光　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地

印刷所　秀英舍工場　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地（電話十九番）

賣捌所　森江佐七　東京市麻布區飯倉町五丁目四十四番地



019830-000-6

特16-162

宝鏡窟之記

笹田 条太郎／註

M26. 8

ABG-0659